



「農村から世界の未来を育てる」をコンセプトに掲げるNPO法人自然塾寺子屋。国際協力機構(JICA)の海外研修員受け入れや農林水産省の中南米日系農業者連携交流、JICA青年海外協力隊の派遣前技術補完研修など、日本と世界をつなぐ幅広い事業を手掛けている。

矢島亮一理事長(57)は高崎市出身。1999年4月から2年間、

### 自然塾寺子屋 (甘楽町小幡)

26

## 農業通じ世界とつながる



同NPOで学んだ協力隊員の派遣国や海外研修生の出身国がピン留めされた世界地図。計100カ国に迫る

# 若者1000人海外送り出す

青年海外協力隊として中米パナマの農村に赴任して農村の人々の温かさや助け合いの大切さに触れ、「豊かさに

移行した。途上国の官僚や生産者などを数多く受け入れてきたが、「日本人の妙な先進国意識は捨てるべ

き。彼らから学ぶべきことは多い」と指摘する。JICA青年海外協力隊の派遣前研修で

は、JA甘楽富岡青年部から発足した「甘楽富岡農村大学」と連携。若者を地元農家で受け入れ、約千人を海外に送り出した。派遣後には帰国報告会を開催する。県外出身の協力隊員がそのまま群馬に移り住み、就農するケースもある。

新型コロナウイルス感染症の影響で、現在は国境をまたぐ研修がストップ。20年3月には世界各地の協力隊員が日本に呼び戻された。一方で、技能実習生が入国できず県内農家は人手不足に陥った。同塾は、志半ばで

帰国し、不完全燃焼と感じていた協力隊員13人(当初は県内在住の6人)と共に、嬭窓村のキャベツ農家を支援した。「嬭キャベ海外協力隊」と名付けた活動は多くのメディアに取り上げられた。海外向け研修もコロナ仕様に切り替えた。ホンジュラスに赴任経験のある森栄梨子事務局長は現在、得意のスペイン語と英語を生かしたオンライン講座を運営する。矢島理事長は「コロナ収束後は対面とオンラインのハイブリッド研修が主流になるのでは。しっかりと準備を進めておきたい」と見据える。

(寺島亮)